平成26年８月８日

平成26年

第２回教育委員会臨時会会議録

大田区役所　　第五・六委員会室

平成26年第２回教育委員会臨時会会議録

平成 26 年８月８日午後２時大田区教育委員会臨時会を開催した。

１　出席委員

鈴　木　清　子	委　員	委員長
尾　形　　威	委　員	委員長職務代理者
芳　賀　　淳	委　員	
横　川　敏　男	委　員	
藤　﨑　雄　三	委　員	
津　村　正　純	委　員	教育長

計　６　名

２　出席した職員

教育総務部長	勢　古　　勝　紀
教育地域力・スポーツ推進担当部長	赤　松　　郁　夫
教育総務課長	青　木　　重　樹
副参事（教育施設担当）	下 遠 野　　茂
学務課長	水　井　　靖
指導課長(幼児教育センター所長兼務)	菅　野　　哲　郎
副参事	長　塚　　琢　磨
学校職員担当課長	室　内　　正　男
教育センター所長	岩 田　美 恵 子
社会教育課長	星　　光　吉
大田図書館長	北　村　　操

計　11　名

３　教科用図書採択の審議に出席した関係職員

指導課　統括指導主事	大　川　　優
指導課　統括指導主事	田　井　　俊　行
指導課　統括指導主事	岩　﨑　　政　弘
指導課　指導主事	小　林　　繁
指導課　指導主事	山　本　　浩　司
指導課　指導主事	木 下 健 太 郎
指導課　指導主事	東　口　　孝　正
指導課　指導主事	古　川　　大　輔
指導課　指導主事	志　賀　　克　哉
指導課　管理係長	佐　藤　　裕　樹
指導課　管理係　主任主事	唐　澤　　毅
指導課　管理係　主事	神　津　　智　哉
指導課　教職員係　主任主事	山　本　　貴　章
教育総務課　庶務係　主事	大　竹　　涼　子

計　14　名

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 13 条及び大田区教育委員会会議規則第３条により、第２回大田区教育委員会臨時会を招集した者は、次のとおりである。

委員長　　鈴　木　清　子

○委員長

ただいまから、平成26年第２回教育委員会臨時会を開催する。

本日は、小学校教科用図書採択の審議を行うため、大田区教育委員会会議規則第14条により、関係職員等の出席も求めている。

本日の出席委員数は定足数を満たしている。よって、会議は成立する。

○事務局職員

本日の傍聴希望者は23名である。傍聴定員は大田区教育委員会傍聴規則第５条により10名と規定されているが、同条ただし書きに、委員会が必要と認めるときはこれを変更することができる、という規定がある。

本日は、傍聴人を50名まで受け入れる用意がある。同意について御協議いただきたい。

○委員長

教科書採択への区民の関心は非常に高まっている。区民の関心に応え、公平・公正な開かれた教科書採択を行うために、大田区教育委員会傍聴規則第５条ただし書きにより、本日の臨時会における傍聴人の定数を50名に増員し、傍聴を許可したい。よろしいか。

（「異議なし」との声あり）

○委員長

傍聴を許可することとする。

（傍聴希望者入場）

○委員長

審議に入る。なお、大田区教育委員会傍聴規則第７条により、傍聴人は、議場における言論に対して批評を加え、又は拍手その他の方法により公然と可否を表明することは禁止されている。次に、会議録署名委員に津村教育長を指名する。

日程第１　平成 27 年度使用大田区立小学校教科用図書採択について

○委員長

昨日の第８回定例会に引き続き、教科用図書の審議を行う。昨日の定例会では、国語、書写、社会、地図、算数の５種目について審議した。本日は、理科、生活、音楽、図工、家庭、保健の６種目について審議する。

初めに、理科について審議する。理科の発行社は５社である。理科について各委員から意見をお願いする。

○教育長

私は、Ｄ社を推薦したい。経過及び理由として、理科については、知識の確実な習得と観察力や思考力、あるいは計画性などが必要であると考え、学習プロセスの明確さについてまず比較・検討した。

その結果、Ａ社が学習プロセスの点で一番明確であり、教科書のレイアウト上もわかりやすく、児童がどのステップの学習を行っているのか常に意識できて良いと考えたが、内容面で比較したときに、若干物足りなさを感じる箇所があった。そこで、内容面をあわせて検討したところ、Ｄ社とＦ社が優れていると思った。

小学校６年で言うと、Ｆ社は、人や他の動物の体の単元のページ数が一番多く、また地震や火山と災害を別建てにするなどの点に特徴がある。

一方、Ｄ社は、科学者の伝記に１ページを充て大きく扱っており、紙質の良さを反映し写真などもより鮮明であるという特色がある。以上、総合的に勘案してＤ社が妥当と考える。

○藤﨑委員

結論からいうと、私はＡ社を推薦したい。見やすさ、段階をしっかり踏んでいるかどうか、それから次の学年へのつなぎ方として、巻末にどのようなものでまとめ終えているかで中身を見たところ、５社のうち、最終的にＡ社、Ｂ社、Ｄ社の３社が優れていると思い、そこを中心に見ていった。

大田区の問題ではあるが、小学校と比べて中学校１年生になると、理科に関する、興味・関心、思考・表現、自然事象についての知識・理解というところが残念ながら大きく劣っているというか、少し遅れているという状態であるので、その辺りの単元を中心に見ていった。最終的に教えやすさ、学びやすさを考えたときに、今、自分はその単元のどこの部分を学んでいるのか、というところのわかりやすさについては、各教科書ともに工夫があった。まとめとか、結果とか、いろいろ書いてあるが、先ほど津村教育長もおっしゃったとおり、構成がはっきりしているという観点で言うと、Ａ社が一番優れていると思ったので、私はＡ社を推薦したい。

○芳賀委員

私は、Ｄ社が良いと思った。

理由としては、科学的な思考というものが身に付くような教科書が良いと思ったからである。

具体的に一つ例を挙げると、６年生に水溶液の性質という項目がある。これは５種類の教科書どれもみんな食塩水や炭酸水、塩酸など４種類あるいは５種類の水溶液を最初に示して、それを分析していきましょうというスタートは同じである。

Ｄ社は、例えば第一に「見る」、あるいは「においを嗅ぐ」という、特に道具を使わないところからスタートし、第二に蒸発した時に固体が残るかどうかという５年生で学んだところに進み、そこから第三に炭酸水の泡を集める、第四に金属を溶かすかというような形で、今までやっていない手法にだんだん進んでいく。

しかも、４種類最初に提起をされた水溶液について全て試している。大人になれば結果は見えているが、「結果はわからない、一応全部試してみるのだ。それを全部集めて表を作り、表のような形で整理するのだ。」という、そういうノートの形の整理まできちんと教えている。

ところが、例えばＢ社やＪ社は、まず最初にリトマス紙から入ってくる。リトマス紙、

要するに酸性、アルカリ性、中性というのは全く新しい話である。まずそこから入ってくる、というのが唐突な感じがする。

それからＤ社を除く４社は、例えば金属を溶かすかというところで、最初から塩酸と炭酸水だけとか、あるいは「塩酸は金属を溶かすか」、といった、要するに結論を先取りしている。もちろん、大人になれば食塩水が金属を溶かさないことぐらい知っているが、やはり確かめてみるところに意味があるのであって、結論を先取りしてしまうというようなことはいかがなものかと私は思う。こういうところはある種愚直、忠実に全部を確かめるという姿勢は、私が考える科学なのである。そこは原則を守っていただきたいと思い、その中で一番私にぴったりしたのが、Ｄ社である。

それからもう一つ申し上げると、例えば６年生の「てこ」の項目を見たが、これは支点と力点、作用点のそれぞれの距離関係を調整しながら実験の計画を立てて、そこを発見する項目である。ここで力点、支点、作用点と言っているだけで、支点と力点との距離、支点と作用点の距離ということを言っていると、頭が少しごちゃごちゃしてくるが、Ｄ社は、調べる条件だけを変え、ほかの条件は同じにするということで、「調べる条件」、「そろえる条件」という言葉で実験条件を整理している。同じところをＢ社は「変える条件」、「変えない条件」、あるいはＪ社は「変える条件」、「同じにする条件」という言葉を使っているが、言い間違いが少なく頭を整理しやすい言葉という意味では、やはりＤ社の「調べる条件」、「そろえる条件」が一番言いやすいと思っている。

そのようなことを考慮し、私はＤ社が一番良いと思う。

○横川委員

私は、Ｄ社を推薦する。今まで幾つか意見が出たが、まず理解を助けるのに大変役立つ構成はＤ社である。Ａ社もそうであり、Ｄ社とＡ社ではこの辺は良い勝負だと思う。

理科の学習を助ける基本的な考え方であると思うが、大事なこととして、理科の実験や研究を実際にやっていくためには、幾つかの決まり事がきちんとあるはずである。その中で、道具を正しく、危険のないように使うという意味で、このＤ社は道具の使い方についてきれいにまとめてある。

もう一つ、実験の注意が欄外に書いてあり、実験の決まり事、注意点が子どもたちに理解しやすいと思った。そのような理由で、Ｄ社を推薦する。

○尾形委員

私はＤ社を推薦する。理由は、次のとおりである。

第一に、問題、予想、観察、実験、結果、考察、まとめといった問題解決の流れを両サイドに「学びの場」として、学習の流れを明確に示してある。

現在、大田区も若手教員が多くなり、現状を考えると、児童も教師も流れが明確で教えやすい、学びやすいことが大事だと考える。

６月に制定された、おおた教育振興プラン2014でも、理科教育の推進を約束している。オール大田で児童に科学的なものの見方、考え方を養っていきたいと思っている。

第二に、基礎・基本の定着のための工夫がある。例えば、見通しと振り返りの場面の設定、重要語句の明示、用具の基礎技能の定着、大事な言葉の意義や言葉の意味の明示、活

用の場面の設定などである。
　第三に、巻末資料に「考えよう調べよう」と題して、実験器具の使い方がチェックシート付きでまとめられており、観察・実験の技能を確実に定着できると考える。
　第四に、問題解決の流れで、学習したことをノートにまとめられるように、記述の仕方も具体的に示している。
　第五に、写真がすばらしい。紙質も良い。大田区は、日本の誇るものづくりのまちである。この写真で、日本の技術力、ものづくりのすばらしさに児童は感動し、児童の理解と興味を引き出せるものと考える。

○委員長
　理科の学習指導要領には、自然に親しみ観察、実験を通して問題解決の能力と、自然を愛する心情を育てるとともに、自然の物事、それから現象についての理解を図って、科学的な見方や考え方を養う、としてある。
　このことからして、どの社も基本的には科学的な見方や考え方を養うために大切な、問題解決の流れで学習が進められている。科学に対して関心度を高める手だての構成となっているか、学習内容が理解しやすくなっているか、学習活動での様々な実験の中で安全面の記載も配慮しているか、などを考えながら見させていただいた。
　Ｄ社は、科学への関心度を高める点では、ビジュアル的に科学者の写真を表紙に使い、文中では科学者の伝記も紹介をしている。目次には、調べ方や使い方のページ紹介をしており、次のページには、学習にあたって「見つけよう」問題を見つけ計画をする、「調べよう」記録して結果から考える、「まとめよう」わかったことをまとめて生かしていくという進め方を示している。
　Ｂ社も同様に、学習の進め方を示しているが、Ｄ社のほうがわかりやすいと思った。
　観察、実験、栽培、飼育やものづくりなど、指導にあたっては様々な機器を使用することもあり、また野外での活動もある。先ほど、お話ししたように、事故のないよう注意が必要であり、Ｄ社は「注意」でわかりやすく示されている。見やすさ、理解しやすさは、単元９の「水の姿」、単元10の「物の体積と温度」のページを見るとわかりやすく出ている。
　実験の流れの様子で、実験器具を主とした写真を用いて、レイアウト上ではシンプルにまとめており、視覚的に見ても実験そのものに集中できるのではないかと思っている。
　また、Ａ社、Ｄ社は、問題予想、結果など、問題解決の流れで学習をわかりやすくノートにまとめられるようになっており、記述の仕方を具体的に示している。どの教科にとっても、ノートのまとめ方は大切である。これは指導者にとっては、ノート指導の助けになるのではないかと思っている。したがって、私はＤ社を推薦したい。
　それでは、一通り意見が出たので、審議のまとめをする。
　審議の結果、Ｄ社を評価する意見が多かったように思う。また、Ａ社を評価する意見もあったが、１社に絞るとしたら、評価する意見が最も多かったＤ社であると私は思うがいかがか。Ｄ社でまとめてよろしいか。
（「異議なし」との声あり）

○委員長
　それでは、Ｄ社でまとめさせていただく。
　続いて、生活について審議する。生活の発行社は、７社である。生活について各委員から意見をお願いする。

○教育長
　私は、生活に関してはＡ社を推薦したい。
　考え方、理由を述べる。小学校１、２年生を対象とした生活科においては、具体的な体験や活動にウエイトを置く教科の性格から、教科書の位置付けをどう考えるかという問題があるが、体験、活動における気付きの質を高めるために事前学習が必要とされており、安全教育も大切である。
　また、基本的な生活習慣の確立のためには、家庭教育での活用もお願いしたいことから、必要な情報は文字によって提供される必要があると考えた。
　Ａ社が適当と判断した理由であるが、まず車椅子の児童が絵の中心に描かれており、ノーマライゼーションの視点が明確であるということ。それから、子どもたちを支える地域の人たちがきちんと描かれており、地域の多様な人材によって学校や自分たちが支えられているという理解を児童に促す効果があると思った。
　また、振り返りの機会が夏休み前と１年経過した時点の２回設けられている。節目節目で振り返り、成長を確認した上でさらに歩を進めることが大切であることから、そこに目配りがきいている点は評価できると思った。
　また、夏休みに地域の行事に参加しようという呼びかけがあり、阿波踊りを踊る児童の写真が掲載されている。児童に地域とのつながりの大切さを意識させるものとなっていると思った。

○横川委員
　私は、Ｊ社を推薦する。導入の１年生の時点で文字がどのくらい読めるか、理解できるかは、子どもによって個人差が大きい。なるべく字は少な目で、写真やイラストが中心で、見てすぐわかるのは、Ｊ社とＨ社であった。
　それから、学習を進めていく上で、やはり段階を分けてわかりやすく書いてあるのがＪ社、「わくわく」「いきいき」「つたえあおう」、そして「ちゃれんじ」、Ｈ社も「ホップ」「ステップ」「ジャンプ」と３段階に分かれているが、Ｊ社のほうは４段階でもう少し細かい。
　また、Ｊ社は写真やイラストのレイアウトを工夫しており、子どもたちの目に入りやすく、子どもの印象に残りやすい。この辺もＨ社と迷ったわけであるが、決定的な差は、Ｊ社の別冊である。「せいかつたんけんブック」という別冊が付いており、これを見たところ非常に楽しい。これを持って、校外授業に連れて行ったときに教師も教えやすいし、子どももこれを見て興味を持つものがいろいろあるのではないか。トノサマガエルが出てきたりと。
　しかし、この別冊の問題点は、なくしてしまうとか、忘れてしまうことである。「先生、今日は僕持ってくるのを忘れました。」といったところが問題ではあるが、それ以上

に、この別冊の良さが私の目を引いたため、結論としてはＪ社になった。

○藤﨑委員
　横川委員がおっしゃっていたことと非常に近く、H社、Ｊ社、それ以外の５社というような比較をした。
　大きな理由は、文字量の問題である。この教科だけは、私の中ではほかの教科とは選択の基準が違っている。例えば国語・算数・理科・社会のように、答えが導き出せる、ないしは答えの方向性がある程度決まっているものもある。しかし、この生活科のように答えがない、ないしはいろいろなものが答えになり得るということを考えたときに、あまり文字情報において、「これが答えなのだ」というところを極力少なくしたほうが良いのではないかと考えた。ある方向に導くという観点よりは、いろいろなことが考えられるという広がりをもって、文字量が多いもの少ないものというふうに分け、文字量が少ないものという前提でH社とＪ社で迷った。
　このH社とＪ社で比較をしたところ、私の中では、使われている絵であるとか、出てくる言葉の広がりというようなことを鑑みたときに、先生の負担は出てくるかもしれないが、先生自身も全員同じ答えを出す必要はないだろうと思い、その観点から扱っている絵も含めた上で、H社を推したいと思う。

○芳賀委員
　結論から申し上げれば、D社が良いと思っている。
　この生活という科目は、私が子どものときにはなかった科目であり、科目の位置付け、あるいは教科書の位置付け等もどう捉えて良いのか少し悩んだ。この教科書を拝見すると７種類あるが、４種類についてそれぞれ裏表紙等に「保護者の方へ」などという記載がある。
　そして、各社少しずつ違うが、基本的には生活科というのは生活する上で必要な習慣や技能を身に付けるものである、ということである。家庭での役割、家庭で身に付けることも大切なのだと、保護者の方にも理解していただきたい、あるいは子どもたちと一緒にこの教科書を活用してくださいと書いてあるところもあった。
　少なくとも、私も基本的にそういう考え方に賛成である。では保護者も一緒に、あるいは保護者も利用しやすいという観点で教科書を選んだときにどうかというと、一番良いのが私はD社ではないかと思った。
　具体的に言うと、上巻では、例えば家にはどんな仕事があるのかなというようなことで、お手伝いなどのことが大判の写真等を使ってかなり具体的に書かれていたり、安全面についての記載もあるというようなことである。
　他には、例えば夏休みなどで、朝顔の観察なども出てくるが、その観察ノートの書き方もきちんと大判で「こういうところに注意して書くと良いのだよ」といったヒントが書かれており、保護者とともに活用する、あるいは保護者が見ても使いやすいというようなところが優れているのではないのかと思った。
　他方、先ほども意見が出ていたが、例えば「保護者の方へ」といった記載がH社にはないのだが、ひょっとしたら少し考え方が違うのかと思っている。こちらは、藤﨑委員もお

っしゃったように比較的字数が少なく、先生がむしろこれをどう活用するのかというような材料として位置付けられている教科書のようにお見受けした。
　きっと力のある先生が使われると、とても効果を発揮されるのかという観点もあり、別にこういう教科書を否定するつもりはない。しかし、私としてはやはり家庭でも、この科目について、特に１、２年生のうちぐらいには関心を是非もっていただきたいというようなことも含め、Ｄ社が良いと思った。

○尾形委員
　私はＨ社を推薦する。理由は次のとおりである。
　第一に、単元ごとに「ホップ」「ステップ」「ジャンプ」の３段階に構成されており、意欲や主体性を高める活動の流れがわかりやすくなっている。
　第二に、春・夏・秋・冬ごとの生き物や、まちの様子の変化を描いたイラストのページがあり、児童の意欲を喚起し、学習のきっかけやまとめとして活用できると思う。
　第三に、活動のまとまりごとに単元を構成し、各単元のねらいや活動の流れがわかりやすいこと。また、下巻の「きせつのおくりもの」は、四季をまとめて１カ所に掲載し、季節ごとに比較しやすいようになっている。
　第四に、写真の児童の表情がすばらしい。探検したい、活動したいという写真から児童の意欲や知的気付きにつながっていくと考える。

○委員長
　今、さまざまな発表があったが、私は尾形委員の内容と同じようなことを挙げている。
　学校生活への適応や発達段階を考慮して、写真やイラストを中心とした構成をしており、文字が大きくなっているという部分について、導入しやすい、全体的に冊子の中から優しさが伝わってくる、そういった点でＨ社が良いと思った。
　生活科については、自然を含めた社会で生活する中での関わり全般での内容の幅が広い。季節の変化に伴った活動の変化のあらわし方では、Ｈ社は背景として同じ場所を使って活動の様子をあらわしている。これについては、どの社も同じような工夫はされているが、Ｄ社は「町のきせつ図かん」で、Ｈ社は「きせつのおくりもの」として掲載している。
　またＨ社については、上巻で春夏秋冬の生き物を載せており、下巻では、風景の移り変わりとして、まちの様子を描き巻末にまとめて掲載をしている。非常にわかりやすく、きれいなまとめ方であると思う。
　あとは、先生によって様々な使い方があろうかと思う。これを拾い上げてまちへ出たり、いろいろな場所、工場、図書館、といった様々なところで生かしていくというのは、先生の力量もあろうかと思うが、使い方によって利用価値がたくさんある。内容については、国語で使ってみたり、理科、社会で使ってみたりということもできる。そのようなことも含めて、最終的にＨ社を推薦する。
　以上で、それぞれの意見をいただいた。審議の結果だが、Ｈ社を評価する意見多かったように思う。しかし、Ａ社とＤ社とＪ社を評価する意見もあった。それぞれの社に良いところや違う部分があり、各委員の皆様に再度、意見をいただきたい。

○横川委員
　私は、Ｊ社を推薦している。H社の推薦が多かったということであるが、Ｊ社とH社は基本的なところでは、かなり同じ部分、姿勢があるかと思う。
　私がこだわったのは、別冊があるかないかというところで、ある意味ではこだわってはいる。しかし逆に言えば、別冊をなくしてしまう、忘れてしまった、といった心配をしなくても良いということから考えれば、H社に意見を変えても良いと思っている。
　「たんけんブック」という別冊も残念ではあるが、逆の意味で欠点もあるので、その辺を考え合わせればH社でも良い。

○委員長
　それでは、H社ということでよろしいか。

○横川委員
　はい。

○委員長
　ほかに意見はあるか。
　今、意見をいただいた横川委員からH社ということが出たので、審議の結果H社を評価する意見が多く、A社、D社が一人ずつということになる。それぞれの社に良いところはあるが、審議の結果、H社でまとめてよろしいか。
（「はい」との声あり）

○委員長
　それでは、生活についてはH社でまとめさせていただく。
　次に、音楽について審議する。音楽の発行社は２社である。音楽について各委員から意見をいただきたい。

○教育長
　私はＦ社を推薦したいと思う。
　理由は、まず扱っている音の世界の範囲が広く、内容が豊富なためである。
　具体的には、小学校２年の「音のスケッチ」では、学校、まち、自然の音など、耳を澄ましていろいろな音を見つけよう、心に残った音は何かを考えさせようとしている。意図的につくられた音楽だけが、音ではないということを児童に理解させる意義がある。
　同じく小学校２年では、「おまつりの音楽をつくろう」というコーナーがある。和太鼓演奏については、大田区でも太鼓連盟が結成されており、盛んで、学校でも取り組んでいるところがある。日本の伝統文化を身近に感じ、自らやってみることで気持ちの高揚につながると考えた。
　小学校４年以降では、巻頭に３人の音楽家のメッセージが掲載されており、それぞれ生活に根づいている音楽のすばらしさや、歌い継ぐことの大切さ、苦労を乗り越えた人生と

音楽への思い、視力の障害を物ともしない姿勢と、音楽のある暮らしが実は貴重であること、音楽には楽しみながら向き合えば良いことなど、児童の音楽学習にとって、あるいは生き方にとって参考となるメッセージが紹介されている。

小学校５年では、日本の伝統楽器である篠笛が演奏者の福原徹さんとともに紹介されている。大田区では、洗足池河畔において「春宵の響」と称して、この福原徹さんらによる篠笛などの演奏会が20年にわたって続けられている。教科書で学んだ演奏家による笛を、まさに年に一度、大田区で聞くことができるわけであり、児童に現代に生きる和楽器のすばらしさ、自然と溶け合う情感豊かな音色をじかに味あわせることができる。

また、子どもたちが好きな曲である映画、トトロの主題歌「さんぽ」の楽譜が手話の解説とともに、各学年の巻末に掲載されている。手話を交えながら楽しんで歌うことで、手話学習につながっていくと思った。

○芳賀委員

私は、Ｇ社が良いと思った。

基本的には、選ばれている曲はそれぞれ良い曲を選んでいるし、もちろん重なっているところもある。そこに大きな違いがあるとは考えておらず、主にどちらかというと現場での使い勝手にある。

Ｆ社は見開きページが結構ある。小学生の机が小さかったりと、見開きを広げると意外に場所をとってしまうため、現実問題としては少し使いにくいところがあるのではないのかと思った。

あと、子どもの興味を引くためにいろいろな工夫をＦ社のほうは積極的にされているという印象を受けたのであるが、気が散ってしまう可能性も少しあるかと思い、比較的、着実に楽譜と楽曲を表現しているＧ社のほうが良いのではないのかと思った。

○横川委員

私は、Ｇ社を推薦する。これは、今、芳賀委員がおっしゃったように、使いやすいという意味で私もそう思った。

もう一つは、日本の歌が割と多く出ているということである。子どもたちはだんだんと日本の昔からあるメロディーに触れる機会が減ってきており、私が「こんな歌も知らないのか」というような子どもたちもいる。そういったものも大事にしていきたいと思い、Ｇ社がＦ社に比べて日本の歌も多いということでＧ社を推薦する。

○尾形委員

私は、Ｇ社を推薦する。理由は次のとおりである。

第一に、知識と教養が確実に身に付けられるように、学習のめあてとなる題材を設定し、６年間を通して段階的、系統的に学びが発展、構成されている。

第二に、鍵盤ハーモニカや打楽器やリコーダーの構え方や、演奏の奏法、歌い方について写真や絵で大きく示して説明しており、児童にとってまねがしやすく、わかりやすい。

第三に、「歌いつごう日本の歌」というページを設け、日本の歌をどの学年も扱っており、世代を超えて日本の音楽文化を共有できるのではないかと思う。

第四に、音楽の歴史をつくった人として、鑑賞教材に関連した作曲家についての写真と紹介がある。音楽に対する意欲と、知識を高められるのではないかと考えている。

○藤﨑委員

私は、両者ともはっきりとした構図というようなものが見つけられていないのが正直なところである

まず、子どもたちが日頃から扱う鍵盤ハーモニカは１年生で出てくる。それから、リコーダーは３年生ででてくる。自分たちが使う場合として考えてみると、どちらの方がわかりやすいのだろうかということなのであるが、両者とも良く考えられており、実はそんなに大きい差がなかった。

その中で、今度は興味を持ってもらうということで言うと、まず低学年のほうからと思い、１年生を中心に見ていった。リズムの打ち方ということで、まだ楽器まではいっていないのだが、リズムの遊び方というところを比較した。Ｇ社のほうで言うと、16ページ、17ページのあたり、Ｆ社も同じく16・17ページということになるが、どちらのほうが遊びの要素、要は興味・関心を引くだろうかというところで見ていくときに、その図の問題や絵の表記ということを考えると、若干ではあるものの、Ｇ社のほうが彼らの興味を引くのかなというぐらいの差しかなかった。

そのため、どちらか一方となると、今のところは特に低学年の中で興味・関心を引けるかどうかという観点から、若干の差でＧ社ということになる。

○委員長

音楽は、音を楽しむ、感性豊かな情操を養うということであると私は思っている。写真、絵、説明文、歌詞、譜面などの紙面の構成から表現の充実性が伝わってくるか、わかりやすい表現なのかという部分と、あるいは、音楽での学習の広がりやつながりが掲載されているかなどを考えながら、比較をした。

結論としては、委員の方々それぞれがＧ社を挙げていた内容も含めてであるが、私もＧ社を選択した。

まず、目に飛び込んでくる全体の色調が、落ち着いていて非常に良いと思ったのがＧ社である。写真や絵、あるいはイラストにより、選曲された歌詞の情景が鮮明に浮かんでくる。例えば、Ｇ社の「心の歌」のページでは、４年の19ページに「牧場の朝」が掲載されている。これは昔からの日本の歌であり、御存じの方が多いかと思うが、この歌のモデルについての説明が入っており、詩の言葉の説明もされている。例えば、「立ちこめた」という部分では、「おおっている」、「黒いそこ」というのは、「夜が明ける前の暗やみ」を指して言っているとか、ほかのページでも同様であるが、詩の言葉の意味を非常に大切にしていると感じた。曲想の豊かさであるとか、歌詞の意味を大切にする指導にあたっては、非常に大切なことであると思っている。

また、楽器の扱いであるが、具体的にいうと、初めて扱う楽器としては、例年鍵盤ハーモニカなどが出てくるわけであるが、ここでも興味深く、楽しくということでは、初めて扱うお子さんたちにはうれしいかなと思っている。鍵盤ハーモニカのページで比較すると、Ｆ社については、写真で示しているが、使われる指や鍵盤が本来主役であり、人物の

顔写真などが入ることによって、そちらに目が行きやすくなる。Ｇ社は、そこをイラストで示し、すっきりとした無駄のないレイアウトで捉えているので、非常にわかりやすいと思った。

また、別の点では、１、２年生から見ていくと、まず最初に、先生とまねっこで声を出して、ドレミの音を一緒に確認をするところがある。声を出して、しっかりとした音程を捉えて歌うので、それによって楽しくなる。高学年に向けて、重なり合う和音の響きから合唱へと学習の流れが続いている。

楽器についても同様である。音色から旋律・リズムと、音の重なりでオーケストラへと続いている。ページ構成の全体の流れも、とても美しい冊子であると感じた。

先ほど話に出ていた郷土の音楽についても、幅広く取り上げられており、各裏表紙には、音楽の歴史をつくった人を掲載し、国歌の導入など、一貫したページの構成になっているという流れで評価をした。最終的には、Ｇ社を推薦したい。

それでは、審議のまとめをする。Ｇ社を選ぶ意見が多かったように思う。Ｆ社を評価する意見もあったが、Ｇ社でまとめてよろしいか。

（「はい。」との声あり）

○委員長

それでは、Ｇ社でまとめさせていただく。

次に、図工について審議をする。図工の発行社についても、２社である。図工について各委員から意見をいただきたい。

○教育長

私は、Ｋ社を推薦したい。

Ｃ社とＫ社は、正直言って甲乙つけがたい面がある。Ｃ社は、Ａ４サイズで紙面を大きくとり、内容的にも、芸術家の作品の紹介に力を入れるとともに、作家のコメントを入れ、児童が創作活動に取り組む際の有効な助言となっていると思った。

一方で、図画工作は、児童が自分で考え、つくるプロセスが重要であり、全ての巻の総ページ数で比較したとき、Ｃ社280ページに対し、Ｋ社は342ページであり、見開き２ページを基本に、豊富な情報量となっている。児童はより楽しみながら、見通しを持って制作に取り組むことができると思った。相対的な比較の中でＫ社が妥当と判断した。

○藤﨑委員

私も、結論としてはＫ社である。

理由は、今、教育長に言っていただいたうちの一つで、実際に図画工作の授業といった場合、教科書をある程度参考にしながら、自分たちが手を動かすということになる。基本的には、どれだけ作品数が多く、興味を引かせるかということと、そこに使う工具ではないが、サービス関連であるとか、その辺についての説明が、どちらのほうがわかりやすいかという観点で比較をさせていただき、Ｋ社とした。

○横川委員

私は、K社を推薦する。藤﨑委員が意見をおっしゃっていたが、どれだけ興味を引かせるかというところは、私も同感である。
教科書を見てそのとおりにやるのではなくて、あくまでも自分たちで物を作ったり、絵を描いたりするというところだと思うので、ある程度、参考文献ではないが、そういった感じで使えば良いのかなと思う。そういう観点からすると、K社のほうがいわゆる子どもの興味を引く。見た感じぱっときれいで、中を見たいと思わせる教科書であると思う。
あとは、書いてある量が多いので、参考文献として使うのならば、やはりたくさん書いてあるほうが良いかなということで、K社を推薦する。

○芳賀委員
私も、結論としては、K社が良いと思った。甲乙つけがたいところもあり、かなり迷ったが、K社のほうが、児童の活動という観点で、活動写真を多く取り入れている。もちろん友達との関係、地域との関係、というところも積極的に打ち出している。何か作って発表するということも大事であり、そのような活動についてのイメージづくりにも役立つのではないか、そういった観点と、また、既にもう何人かの方がおっしゃっている点も含めK社が良いと思った。

○尾形委員
私も、K社を推薦する。理由は、次のとおりである。
第一に、児童の活動写真を多く取り入れて、形や色、材料や用具の扱い方などの活動のイメージが捉えやすくなっている。
第二に、各巻に「使ってみよう材料と用具」を６ページ設定し、材料、用具の取り扱い方を詳しく、わかりやすく、丁寧に示してある。また、「気をつけよう」、「片付け」などのワンポイントが示されている。
第三に、各学年で各領域の題材がバランスよく構成されている。
第四に、「図画工作の広がり」のページで作品紹介や美術館での鑑賞活動など、詳しく示されている。
第五に、各題材のページの上に観点別評価項目に即した学習のめあてを示し、課題意識をもって活動できるようになっている。

○委員長
結論としては、K社を推薦する。
私の場合は、ぱらっとめくったところで、最初からK社が良いと直感的に思った。
内容は、いろいろと皆さんに説明をしていただいたが、具体的なことをプラスして申し上げる。K社については、「きをつけよう」、「かたづけ」ということで、安全面や環境について促している。ほかの学習活動でも同じであるが、目的・目標を達成することだけでなく、他のことへの気配りや気付きは大切であると思っている。学習のめあて・活動のヒントが示されており、どこから手をつけていくかがわかりやすく、活動に入りやすい。また、先ほどの発表のように、情報量も多く、見る楽しさも備えている。
見る楽しさからいうと、美術作品をたくさん見ることは、感性を磨けるということであ

る。本物の美術品や絵画などは、校外学習の機会をつくって、管理方法一つとっても、温度や湿度、環境、扱いなど、多彩に学ぶことができると思っている。
　それから、「図画工作の広がり」のページで、「表現は、メッセージを伝える力がある」、また、「図画工作でつながる」のページでは、「地域の人、お友達、世界の人」と「美術館」ということで、校外学習における広がりやつながりを掲載しており、多くの関わりは、非常に楽しい体験になろうかと思う。このようなことも含めて、Ｋ社を推薦する。
　以上、一通り皆さんの意見をいただいた。
　審議のまとめをする。審議の結果、図工においてＫ社を評価する意見で一致した。Ｋ社でまとめてよろしいか。
（「はい。」との声あり）
○委員長
　図工は、Ｋ社でまとめさせていただく。
　次に、家庭について審議する。　家庭の発行社は２社である。家庭について各委員から意見をいただきたい。

○教育長
　私は、Ｃ社を推薦する。理由であるが、掲載されている事例が豊富で、関心のある児童が、発展的な学習に使用できるからである。
　また、将来を含めて、辞書としても活用できると思った。
　具体的な場面で比較をすると、例えば、Ｃ社の16・17ページに、これはＡ社では14・15ページになるが、ニンジン、ブロッコリー、キャベツをゆでる場面がある。その場面でＣ社は、写真を使用し、一目でわかるように順を追って説明するなど、記述が丁寧で理解しやすいように編集されている。
　また、ミシン学習の単元が、多くの家庭科作品展覧会の前に学習できる単元配置になっており、ミシンを活用した作品を展覧会に出品できるメリットがある。
　また、振り返りは単元ごと、学年ごとに設けられており、学習の定着に向けたきめ細かい配慮が伺える。

○横川委員
　私は、Ｃ社を推薦する。Ｃ社は、具体的な例をたくさん出しており、先ほどの図工と少し似ている部分もあるのかもしれないが、参考文献として使うということがまず一つ。
　もう一つは、自分勝手なやり方ではまずいという部分で、基礎的な知識や技術、その習得させるために必要なことがきちんと書かれているのはＣ社である。以上の２点から、Ｃ社を推薦する。

○芳賀委員
　私は、結論としては、Ａ社が良いと思った。
　ただ、これは、かなり迷った結果である。もともと家庭科というのは、実技科目だと私は理解しており、恐らく教科書ばかり読むタイプの授業ではないのであろうと思う。何よ

りも実技で実際の作品を作ったりするほうが料理にしても、裁縫にしても大事なのであろうと考える。
　それで、もし、教科書を頼りに一生懸命見るとしたらどういう場面かというと、自分一人でこれをやらなければならない場面である。早い話が、私が自分で料理を作る、私が自分でミシンをしなくてはいけないという場面を想定した場合に、では、自分は本屋に行って、この参考書が二つ並んでいたときに、果たしてどちらを買うだろうかという観点で考えることにした。
　そういう観点で見た場合、もちろん両方とも献立は似ていたり、参考で作るものも似ていたりするわけであるが、多分私が迷うであろうところの説明が、私のような料理も裁縫も余り得意でない人間がやる場合に、役立ちそうな記載がわかりやすく、大きく載っているのがＡ社であった。
　だから、私が本屋で選ぶとしたらＡ社であり、実用的な観点からＡ社が良いのではないかと考えた。

○藤﨑委員
　私も、結論から先に申し上げるとＣ社になる。Ａ社とＣ社の比較という観点では、一つの例として、ソーイングという縫いのところがあるのだが、そこの一つ一つの写真であるとか、細かいところまでの配慮であるとか、Ａ社は相当たけていると思った。
　玉結びはどうするのかとか、うまくいかないときにはと、子どもがぶつかるであろうところが、非常に丁寧であった。一つ特徴として感じたのは、右手でやった場合と左手でやった場合という写真の区分けも、Ａ社は、しっかりと載っていた。
　そもそも自分が左利きだということもあるが、小学校１、２年生、３、４年生ならまだしも、５、６年生になってくると、そこはなくても十分に想像でき、余り問題にならない。最終的に私が判断をしたのは、裁縫なのか、食事なのかと考えるときに、私は、食育のほうが、重要なのではないかと思っており、Ｃ社は食に割いているページであるとか、食のところだけ、ページにごはんマークをつけていたりと工夫があった。
　ページの見やすさの工夫というのは両方ともにあった。Ｃ社であれば、最初の見開きを開けたところで、家族や家庭についての学習なのですよ、食生活ですよと色分けをされているし、Ａ社で言えば、単元の終わりに、「いつも確かめよう」というところのチェック項目が入っていたりとしたが、最終的には、その食育というところの力点に重きを置いて、Ｃ社とさせていただいた。

○尾形委員
　私も、Ｃ社を推薦する。理由は以下のとおりである。
　第一に、実習・制作の作業過程を横に流れるように示すことで統一し、実習や作業の際に見やすく、または、わかりやすいと考える。
　第二に、学習のヒントや注意の「一口メモ」のコーナーが充実しており、自ら主体的に学ぶようにしてある。
　第三に、学習後に自己評価ができるように工夫し、家庭への実践へとつながっている。
　第四に、学習のめあてで始まり、課題解決型学習を通して、最後には「ふり返ろう、生

かそう」で家庭実践につなげるように工夫されている。
第五に、チャレンジコーナーを設定しており、調理や、身の回りの生活に関わる発展課題をまとめて紹介しており、夏休みなどの家庭で実践できる題材になっている。これは、現在、大田区では、夏休みに各学校で地域・保護者の方々の協力をいただきながら、様々な活動が行われており、この活動に非常に有用だと考える。

○委員長
家庭科であるが、学習指導要領では、生活の基礎、基本的な知識や技能の習得をしっかり身に付け、身近な生活に活用できるようにするとともに、衣食住や家族生活に関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高め、その大切さに気付くようにするとしている。
結論からいうと、私もＣ社を選んだ。情報量も多く、日常生活に必要な使途的技能などが丁寧に示されている。先ほど教育長もおっしゃっていたが、本区の３学期に行われる家庭科作品展覧会に作品を出品するために、その時期に合わせたところでミシン学習が出ており、指導する側が改めて年間指導計画を作成しないでも良いということもある。
それから、学年の区切りに振り返りができるようになっている。また、学習の自己評価も題材ごとに設定をされていることも挙げられる。
そして、具体的に私が関心をもったのは、非常に小さい一口メモのようなものである。私自身も経験があるが、家庭において親にそのようなことを教わってきた。ソーイングの中で、一口メモに、「ソーイングは『さいほう』または『ぬうこと』で英語ではｓｅｗｉｎｇ」と書くのだと、このように細かく載っている。そこを読んだときに、そういえば私も「ニット」という言葉は、編む、あるいは編むことを指す意味だというのを教わったことを思い出した。
また、布を切るときに、「裁つ」と言うが、通常布を「切る」と言ってしまうときもあるのであろうが、家庭科の中で言うと、裁つという言葉を使う。また、その裁つという言葉で、布を切るはさみのことを裁ちばさみと言う。その裁ちばさみについては、布だけなら良いが、ほかのものを切ってしまうと、非常に切れにくくなる。これは、もう生活の中で体験して知っていくことであるが、そのようなことも書かれていた。
それから、名称では、布を折ったときに、折り山になっているところを「わ」という、季節感が出ているところでは、「打ち水は、夏の暑い日に道路などに水をまくことで気化熱を利用して気温を下げます」と、そのようなことが書かれている。食のところでは、おかずのことを「菜」と言いますよと、そのようなものがたくさん載っている。
かつてＮＨＫの料理の番組で、ある料理の専門家の先生が、渋味だとか、色味について話をしていた。これについても「野菜や山菜などに含まれる渋味やえぐ味をあくと言う」と、載っていた。皆さん、「あくがある」ということをよく使うが、例えば、「人物的にもあくがある」とか、そのようなことを言ったりもするが、あくは全部取ってはいけない。そのあくが自分の特徴になったりするからである。
料理でも、あくを生かしてする料理もある。ささいなことであるが、一口メモの中から広がりを見せていろいろな教えができていくのかなと、このようなことも思った。
現在は、日常生活において、親子で会話をしながら同じことをするというのが、とても

少なくなったと聞いているが、指導上でのスパイスとして、また、言語活動へと生かせるものなのではないかと考えた。よって私は、Ｃ社を推薦したいと思う。
　それでは、一通り意見が出たので、まとめさせていただきたい。
　審議の結果、Ｃ社を評価する意見が多かったように思う。Ａ社を評価する意見もあったが、１社に絞るとしたら、評価する意見が最も多かったＣ社であると私は思うが、いかがか。Ｃ社でまとめてよろしいか。
（「はい。」との声あり）

○委員長
　それでは、家庭はＣ社でまとめさせていただく。
　次に保健について審議する。保健の発行社は５社である。保健について各委員から意見をいただきたい。

○教育長
　私はＮ社を推薦したい。理由であるが、まず、考えてみよう、やってみよう、調べてみよう、話し合ってみようなど、児童が自ら取り組むプロセスを重視し、その上で活用や振り返りを置くことで知識の定着を図っている。
　また、小学校３、４年、「育ちゆく体とわたし」では、子どもと大人の体つきの違いを体操着を着用した姿で比較しており、好奇心をあおらず、冷静に知識を伝えるのには良いと考えた。小学校５、６年、「交通事故の防止」では、自動車の内輪差や死角を明示しており、本区で最近発生した児童の死亡事故を踏まえて、改めて児童に注意を喚起する意味からも、重要な記載であると思った。
　同じく、「犯罪から身を守るために」では、犯罪が起こりやすい場所や場面で、車の中に引っ張り込まれる場面が取り上げられており、これについても、昨年発生した女子中学生誘拐事件を教訓化する意味から、大切な記載であると思う。
　また、インターネットをめぐる犯罪やトラブルについても、具体的な例を挙げ、その対策を示すなど、インターネット利用で陥りやすいトラブルに注意を喚起する意味で、必要な記載であると思った。

○横川委員
　私は、Ｎ社を推薦する。重複するところもあるが、私がまず目についたのは、コーナーであるが、学校医、学校薬剤師、栄養士などの話を登場させて、子どもたちに具体的に語りかけていくものである。
　保健は、ある程度専門的な分野もある。学校の中で現実的に子どもたちは、学校医や薬剤師、栄養士などと会うわけであるが、そういった人たちの言葉を借りて、具体的に語りかけるというところがよろしいのではないかと思った。
　それから、子どもたちに自分で考えさせる内容になっている。３、４年の19ページの「かつよう」のコーナーで、自分の考えを述べるコーナーがあり、そこに自分の意見を書くようになっている。「こういうとき、あなたなら何と具体的に言ってあげますか」という問いかけに対して、子どもたちが自分で答えを書けるようになっている。

また、もっと子どもたちがいろいろと、自分で更に考えを深めていくということに対して工夫を施している。「もっと知りたい・調べたい」というコーナーを２ページにわたって設けており、更に子どもたち自身に考えさせることに役立っていることから、Ｎ社を推薦する。

○芳賀委員

私もＮ社が良いと思った。理由は、既に出ているところもあるが、私が注目したのは、スクールカウンセラーというものがどう位置付けられるかという観点である。５社のうち、スクールカウンセラーというものがはっきり位置付けられて出てくるのは、Ｂ社とＮ社の２社だけであった。

しかも、その中でＮ社のほうは、スクールカウンセラーの話というものがあり、いわゆる思春期の悩みの欄が充実しているわけであるが、その回答をする人としてスクールカウンセラーを位置付けて大きく取り扱っている。

今、大田区の教育の中で一つの課題となっているのが、いわゆる不登校者を出さない、あるいはその率を下げるということである。不登校になる前にいろいろなところに相談しに行っていただきたいわけであるが、一つ重要なのがやはりスクールカウンセラーなのであろう。

大田区は、小中に全校配置している。そういう方がいるのだと、はっきり言えば、養護の先生との区別がつかないと困るという意味があって、養護の先生とは違うスクールカウンセラーがいるのだということを小学生の段階から積極的に訴える機会があるほうが良い、そのように思っている。

そのような観点で、私は、Ｎ社が良いと思った。

○藤﨑委員

私はM社とＮ社で迷った。観点としては、先ほども出たが、犯罪の防止のところで、「気を付けましょう」ではなく、どのような対処をすべきなのかが、どれだけ書かれているのかということと、インターネットについてである。

最終的に重きを置いたのは、心の健康である。心の発達と、悩みが出たときに「悩みが出るのは当たり前なのですよ」というところは、各社にあった。それに対してどのような話し合いをもつのか、どういう観点でお互いにやり取りをしたほうが良いのか、ないしは、やり取りをする方法があるのかという対処について触れていたのは、M社とＮ社に絞ったときに、Ｎ社のほうがより多かった。ほかの観点でいうと、他の委員がおっしゃったとおりである。最終的には、この「心の発達」、「悩みの対応」というところで、Ｎ社に決めた。

○尾形委員

Ｎ社を推薦する。理由は次のとおりである。

第一に学習課題をつかむ、学習課題を自分のこととして捉える、本文、様々な学習活動、資料を通して学習する、そして、本文でまとめる。習得した知識で活用するという学習の流れを形にした授業構成でわかりやすい。

第二に活用の欄を設け、習得した知識を活用して課題に取り組むことを通して、日常生活に生かそうとしている。

第三に文章と資料などのバランスが良く、とても見やすくわかりやすい。授業で扱いやすいと考える。

第四に、薬物乱用防止など、今日的課題を詳しく取り上げている。

第五に、一単位時間で学習する指導の分量も見開き２ページ、または４ページ単位での構成が基本となっており、とても学習の見通しが立てやすいと考える。

第六に、大田区が５月・10月に設定して、推進している「早寝・早起き・朝ごはん月間」の取組との関連が深く、効果的に活用できる。おおた教育振興プラン2014の実現に非常に効果的な教科書ではないかと考える。

○委員長

昨今は、子どもに関わる事件・事故絡みの案件が非常に増加している。生活の安全に関して、今まで以上に手だてが必要になったのかなと感じている。

成長期にある児童にとっては、思春期の体の変化については、関心事であり、不安や疑問も出てくる。これらの学習については、メンタル部分も含めた上で指導する必要があると考えており、それを踏まえた上で内容比較をした。各委員から頂戴した意見と重複しているが、具体的なことを何点か申させていただく。

まずは、３、４年の健康について、１週間のリズムある生活パターンを作るために、１週間を振りかえるチェック表を掲載しているのはN社である。A社も本区で推進している「早寝・早起き・朝ごはん」の取組に関連した効果がある。

それから、また、５、６年に薬物であるとか、けがの手当て、喫煙、病気、犯罪、事故、飲酒、医薬品の使い方、それから、地域の保健活動など、それぞれ網羅して掲載されているが、わかりやすくまとめられているのが、N社である。

それから、先ほどもあったが、ニュースで取り上げられた今日的ないろいろな事案を、タイムリーに捉えて、関連資料が非常に効果的であると考える。ことに、薬品の問題であるか、喫煙とか、飲酒などについては、小学校高学年から中学生に向けて非常に指導を深めていく必要があろうかと思っている。

また、４年生の「大人に近づく体」の単元では、男女の体のちがいに対しての表現がイラストで違和感なく示されている。また、単純にＡ４判で使いやすいと感じた。よって、N社を推薦する。

それでは、審議のまとめをする。審議の結果、N社を評価する意見で、一致した。N社でまとめてよろしいか。

（「はい」との声あり）

○委員長

それでは、N社でまとめさせていただく。

これで、一通り審議は終わった。ここで、20分の休憩をとる。

（　休　憩　）

日程第２　　「議案審議」

○委員長
　第２回教育委員会臨時会を再開する。
　昨日と本日の２日間で審議し、追加議案となった平成27年度使用大田区立小学校教科用図書採択に関する第27号議案から審議をする。
　第27号議案について、事務局職員の説明を求める。

○教育総務課長
　平成27年度使用大田区立小学校教科用図書採択について説明する。
　平成27年度使用大田区立小学校教科用図書については、７月23日の第７回教育委員会定例会において、教科用図書調査委員会委員長から、調査報告について説明をいただき、昨日の第８回定例会と本日の２日間にわたり、御審議をいただいた。
　ここで本案を議案として提出し、平成27年度使用大田区立小学校教科用図書の採択をお願いする。小学校教科用図書の一覧については、次のとおりである。

平成 27 年度使用大田区立小学校教科用図書

種目	発行者	書名
国語	光村図書出版	国語
書写	光村図書出版	書写
社会	東京書籍	新編　新しい社会
地図	帝国書院	楽しく学ぶ　小学生の地図帳
算数	東京書籍	新編　新しい算数
理科	学校図書	みんなと学ぶ　小学校　理科
生活	光村図書出版	せいかつ
音楽	教育芸術社	小学生の音楽
図工	日本文教出版	図画工作
家庭	開隆堂出版	小学校　わたしたちの家庭科
保健	学研教育みらい	新・みんなの保健

　以上である。

○委員長
　平成27年度使用大田区立小学校教科用図書採択について意見はあるか。よろしいか。
（「はい。」との声あり）

○委員長
　それでは、第27号議案について、原案どおり決定してよろしいか。
（「はい。」との声あり）

○委員長
　原案どおり決定する。
　次に、第26号議案について、事務局職員の説明を求める。

○教育総務課長
　第26号議案、学校教育法附則第９条の規定に基づく平成27年度特別支援学級使用教科用図書採択について説明をする。
　大田区教科用図書採択要綱第14条には、区立学校に設置されている特別支援学級で使用する教科用図書については、区立学校の通常の学級で使用する教科用図書を使用する。
　２、前項の規定にかかわらず、学校教育法附則第９条に規定する教科用図書を使用する必要があると教育長が認めた場合は、特別支援学級設置校の校長会が審議し、適切と考える教科用図書を教育委員会へ報告するとある。
　なお、学校教育法附則第９条に規定する教科用図書の採択期間についは、児童・生徒の実態により一層対応した教科用図書を選定するために、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律施行令第14条の規定からは除外されており、４年間によらず、採択している。
　教科用の図書の選定については、指導課長から説明をさせていただく。

○指導課長
　特別支援学級で使用する教科用図書の選定について、御説明申し上げる。
　各設置校の児童・生徒の障害の種類、程度、能力、特性に最もふさわしい内容、文字、表現、挿絵、取扱い題材であること、可能な限り系統的に編集されており、教科の目標に沿う内容を持つ特定の教材、もしくは、一部の分野しか取り扱っていない図書、参考書的図鑑類、問題集などは除くといった観点のもと、特別支援学級設置校の校長会が東京都教育委員会の特別支援教育教科書調査研究資料と各設置校の意見を踏まえた上で、適切と考える教科用図書として選定したものである。
　また、報告された図書の一覧は、別紙のとおりである。御覧いただきたい。

○委員長
　学校教育法附則第９条の規定に基づく平成27年度特別支援学級使用教科用図書採択についての意見はあるか。

○藤﨑委員
　一件一件についてということではないのだが、今まで選ばれていたものと大きな変化であるとか、何か特徴的なものというのは、今回あったのか。

○指導課長
　特に伺ってない。

○委員長
　ほかに意見はないか。
（「はい。」との声あり）

○委員長
　それでは、原案どおり決定してよろしいか。
（「異議なし」との声あり）

○委員長
　それでは、第26号議案を原案どおり決定する。
　これをもって、第２回教育委員会臨時会を終了する。
（午後４時00分閉会）